

子育て時の外出環境の歴史的変遷に関する一考察*

Review of historical transition in Japan for outgo-circumstances while raising children *

谷口綾子**・柳田穰***

By Ayako TANIGUCHI**・Yutaka YANAGITA***

1. はじめに

次世代育成支援のための施策において、出産や育児により一時的に社会参画が困難になる女性の社会参画を支援することは極めて重要である。そして、子育て中の女性の社会参画を促すためには、パートナーである男性も含めた「子育て時の外出行動に対する支援」が必要不可欠である。

しかしながら、交通計画の分野では、さまざまなバリアフリー対策が実施されているものの、「子育て」時、とりわけ乳幼児の子連れでの外出行動に関する実態調査や、支援施策についての取り組みは限られたものとなっている。これは、現代において、乳幼児の「子育て」に携わる期間がライフステージのごく一部であること、また少子化により子育ての経験を持たない人の割合が増加していることなど、いわゆるニッチな分野であることも影響しているものと思われる。一方で、子育て時の外出には、ハード・ソフト両面で様々なバリアを伴うこともまた事実であり、それらを緩和する施策が必要とされている。

さて、具体的に子育て時の外出行動支援を検討するに当たっては、まず、どのような場面・目的で外出しているのかを把握することが重要となると考えられる。子育て時の外出の目的は、これまで子育てを主に担う主体とされてきた女性の職業やライフスタイルに大きく依存している。また、外出時に子どもをどうするのか(置いていく、預ける、連れて行く)によっても、どのようにして連れて行くのか(自動車、自転車、徒歩：おんぶ、抱っこ、ベビーカー等)によっても、支援の方法は異なると考えられる。

本稿では、子育て時の外出行動支援を考えるに当たり、(1)我が国における子育て従事者の職業・環境、(2)子育て時の外出手段、の二つに着目し、それらの歴史的変遷について、既存文献や研究のレビューを行うこととする。

2. 子育て従事者の職業・環境の歴史的変遷

子育て時の外出行動は、子育て従事者の職業やライフスタイルに依存していると考えられるため、ここでは、子育て従事者の歴史的変遷について、いくつかの文献をレビューし、我が国の子育て状況の特徴の一端を示すこと

*キーワードズ：子育てバリアフリー、子連れ外出

** 正員，工博，筑波大学大学院システム情報工学研究科
(茨城県つくば市天王台1-1-1 Tel & Fax 029-853-5734)

*** 学生員，筑波大学大学院システム情報工学研究科

を試みる。

(1)女性のライフコースの変遷

この文献¹⁾では、子育て従事者、子育て環境の大きな変化に伴う諸問題と、それを緩和するための次世代育成支援策について、包括的に言及している。この中で、女性のライフコースの変遷について、概要を紹介する。

本書の中に、日本女性の三世代のライフコースの変化を示した図がある。これは、労働省(現：厚生労働省)が「現代日本において女性の社会進出は必然である」ということを説明するために1988年に作成した「婦人のライフサイクルの変化」の図に、本書の筆者が初経年齢を追加したものであり、便宜的に「祖母の世代(1905年生まれ)」「母の世代(1927年生まれ)」「娘の世代(1960年生まれ)」と呼称されている。

この図について、筆者は、従来からあった産婦人科的思春期(第二性徴の始まりから定期的月経の到来まで)と、昭和になり新たに生まれた「精神科的思春期(第二性徴の始まりからアイデンティティが確立される頃)」とは、その意味が質的に大きく異なっていること、ならびに、母の世代、娘の世代と移り変わるにつれ、精神科的思春期の期間が長くなっていることを指摘している。

他にも、三世代を比較した特徴として、以下の5点が挙げられている。

(ア) 寿命が63.5歳から81.8歳へと18.3歳も延びたこと。

(イ) 長子出産から末子出産までの期間である「出産期間」が12.5年から2.3年へと極端に短くなったこと。

(ウ) 出産する子どもの人数が5.1人から1.6人へと激減したこと。

(エ) 長子出産から末子就学までの期間と定義される「子育て期間」が19.0年から8.8年へと短縮されたこと。

(オ) 寿命が延びる一方で「子育て期間」が短縮し、子育て終了後の期間が19.0年から46.3年へと延びたこと。

三世代のライフコースを比較することで、少子高齢化、子育ての問題、女性の就労や生き甲斐の問題、そして高齢者介護の問題など現代日本が抱えるあらゆる問題を包含していると筆者は述べている。

本書の筆者は、より詳細にこの三世代について考察を行っているので、以下にまとめることとする。

祖母の世代(1905年生まれ)の頃は、子供は生めるだけ生み、子どもを育てながらお年寄りを看取り、未っ子が成人するかしないかと言う頃に父親が亡くなるという時代

であった。農業、漁業、林業など第一次産業中心の時代であり、当然女性は仕事をしてきた。このような子育ては何百年もの間、ほとんど変わらずに続いてきた伝統的なものと言える。そして、この頃までは子育ての伝承はしっかりとできていたのである。

母の世代(1927年生まれ)の子育て時期は、いわゆる日本の高度成長期(1955～1975年)に相当するもので、専業主婦が初めて登場した時代である。この世代は、いわば「初代専業主婦」とも言えよう。専業主婦として、野良仕事から解放され、生活はどんどん便利で豊かになり、将来にも夢があった。この時期から子育てが大きく変化し、子育ての伝承はことごとく途絶え始める。しかし、親自身は、子ども時代には子守を日常的に行い、家事もするなど、生活実体験をたくさん積みながら育ってきた世代であったため、それほど問題は表面化していない。親になるための準備を小さい頃から日常的に積み重ねてきた最後の世代と言える。

専業主婦という層は、ごく一部の富裕層、支配階層を除き、古来より伝統的に存在したものではない。前述の「母の世代」が専業主婦の始まりの世代であるが、その育ちの課程で体験した経験や、それに伴う価値観、感性、発送などは「娘の世代」の専業主婦とは全くと言っていいほど異なっている。このため、筆者は「娘の世代」を二代目専業主婦と呼称し、初代専業主婦とは区別している。

娘の世代(1960年生まれ)が幼少期を過ごした1970年代には、既に日本社会は急激に変化し、生活実体験よりも間接体験・メディア体験の方が多くなりつつあった。子育ての時期はあっという間に終わり、そのあとに40年、50年という長い人生が待っている、という世代なのである。子育てのあとに40年、50年という自分自身が使える人生が残っているということは、人生を豊かにする可能性が広がったと言えるかもしれない。しかし一方で、子育てのみで人生を生き活きとは生きられない時代になったと言うことでもある。子育て後も長い人生が残っていること、しかもその将来に展望を持たないことが現代の子育てを苦しいものにしていく一因とも言えよう。

そして現在は、「娘の世代」よりも10～20歳若い世代が子育てをしている。パラサイト・シングルとして「外では大人としてシングル・ライフを謳歌し、家では子どもとしての特権を満喫していた」世代が子育てをしているのである。子育ての現実を全く知らないままに子供を産み、否応なく一人で子育てをする。日本社会が「子どもを生み育てる」という人類にとって最も基本的な生存環境を失いかけていることの一つの証左ではないかと、筆者は問いかけている。

(2) 育児書の歴史的背景

この文献²⁾は、日本、米国、英国、フランス、中国で発行

されている代表的な育児書(それぞれ11～17冊ずつ)を横断的に比較検討するとともに、過去(第二次世界大戦前後)に発行された育児書との記述の変遷を縦断的に比較している。この中で、育児書が発行され始めた歴史的背景として、本書の筆者は以下のように述べている。

かつて、育児書は西洋においても父親のための家政書であったが、産業社会のもとで子どもの教育を一手に任せられるようになった主婦のための子育て書へと移っていったように、日本でも、江戸時代においては主として男性のよる男性のための書だった子育て書が、時代を居って女性のための書へと変貌していった。我が国では、戦後、特に高度成長期以後の時期に、サラリーマン化、都市化、大衆の受験熱、女性の社会進出などを背景に、育児書ブーム、育児雑誌の大衆化の時代が訪れ、商業ベースにのった育児雑誌が1966年の「赤ちゃんとママ」をはじめ創刊されてきたという経緯がある。

育児書以前の時代、育児のノウハウは口から口へ、人から人へと伝えられてきた。しかし戦後、特に高度経済成長以降は、核家族化の進行等、急速な社会環境の変化を背景に、口伝えをはじめとする従来の情報源から絶たれ、実際の子育ての経験にも欠け、急速に変化する子育て環境の中で子育ての責任を任された女性に向けて「専門家」が語りかける育児書が、子育ての重要な情報源の一つにのし上がってきたと言える。これらの専門家は、子育ての経験や自らの道徳性の高さといった従来の子育て助言者の資格とは異なり、「科学」による裏付けや、マスメディアの発達、大衆の教育レベルの向上と言った条件に支えられながらアドバイスを行うのが特徴となっている。このような傾向は、例えば米国においても見られ、アメリカ人が子育てで困難に出会ったときに親に頼らない理由として(ア)自立性を失うのが嫌だ、(イ)個人的問題は、近い親戚よりも専門家の方に行く、(ウ)親の代の子育ては網時代後れであると思っている、が挙げられている。

3. 子育て時の外出手段の歴史的変遷

子育て時の外出手段の歴史的変遷について、そのみに焦点を当てた研究は非常に少ないため、既往文献をいくつか紹介することで、その歴史的変遷の一端を浮かび上がらせることとしたい。

(1) 子育て時に使われた外出のための道具

文献³⁾は、子育ての諸相について、明治～大正生まれの女性に聞き書きし、筆者の考察とともに取りまとめたものである。この中で、子育て時の外出用具について述べられた部分の概要をいくつか紹介する。

ツグラ：

ツグラは、昔の育児用具の一つで、地方によっては工

ジコ、イツミなどと呼ばれていたものである。1960年代の高度成長期以前には、まだ相当広く、農村では用いられていたようである。ツグラは、主としてまだ歩き出さない赤ちゃんを座らせて入れておくもので、わら製のものや木や竹製のものなどがあり、多くは円筒形やそれに近い形をしている。その底に、もみ殻や灰・わら・木炭あるいは海藻などを入れて排便に備え、おむつをしない赤ちゃんをそこにすわらせて、まわりをボロ布などで囲み、赤ちゃんを固定させておくのである。

昔の農家では、赤ちゃんの安全のためにもこれを用いる必要があった。母親を含めて一家が農作業に出ている間、赤ちゃんはツグラの中に入れておくのが一番安心であり、またそうするより他なかつたのである。そして日中、ほんの数度、母親が帰ってきて乳を含ませたりしていたのである。また母親は家にいても、いろいろな仕事があり、その間もツグラは用いられていた。比較のおだやかな仕事の時にはおんぶもできたであろうが、農作業のようなものではとてもそうはゆかず、結局ツグラを用いることが必要とされたのである。

行李と兵児帯

いつも赤ちゃんに目の届くところにいられなかった生活は、農家に限ったことではない。町なかであっても、例えば商店や家内工場を抱え、母親もその仕事のメンバーであるような場合には、ツグラを用いなくとも、その代わりとなるもの、例えば行李が用いられていた。行李は、ツグラのように排便を処理することはできないとしても、赤ちゃんの簡易ベッドとしては適切なものであったと言えよう。戦中戦後の物資不足の折には、育児書にさえたびたび行李の使用のことが出てくる。

しかし、はいはいしたり、つかまり立ちをしたりするようになると、行李は使えなくなる。そうしたときには、赤ちゃんの腰を兵児帯などでしばり、その端を柱に結んでおくやり方も取られたようだ。しかしこの場合には、帰ってきてみたら縁側から落ちていたとか、ぐるぐる巻きになっていたとか、ちょっとした買い物などの間でさえもよく事故が起こったようである。

乳母車

目を離す危険を避けて、外出の時には赤ちゃんと一緒に連れて行くためには、おんぶや抱っこをするのでなければ、行李に車が着いたものがあればよいわけである。明治になって、欧米から乳母車が入り入れられ、ごく限られた範囲ではそれが用いられるようになっていった。

乳母車は、都市で、乳母や子守が求めにくくなると同時に、核家族化によって、育児が母親一人の手によるようになってゆくにつれて、普及するようになったのではないかと筆者は類推している。また、道路が比較的平坦でこぼこが少なくなければ使いにくいということを考えると、やはり乳母車というものは、都市の生活を背景にしたも

のだと言えるだろう。ここでも、一つの育児用具が、人々の生活や文化のありようと結びついて登場していることを見て取れると述べている。

(2)おんぶと抱っこの国際比較

前述の文献2)において、子連れでの外出手段の一つ「おんぶ」について言及されている部分を抜粋し、概要を紹介する。

今日、女性や男性がおんぶひもを使って前や後ろに子どもを抱いている写真が載っているのは、日本の育児書だけではない。特にイギリスの育児書には多く、アメリカにおいても登場し、かつて、西洋では「野蛮」のイメージと結びつけられていた子どもをおんぶする姿、乳を含ませる母親の姿などが、全体として見直されているのである。

しかし、これらの国のおんぶの写真から漂うイメージは、多くの場合、かつての日本で見られたような、子どもをおんぶしながら懸命に作業をするような、生活感のあるものではない。きれいな市販のおんぶひもで胸元に子どもを抱えた父親が、子どもの目を見つめながら立っている。つまり、子どもとの身体的・心理的交流をしながら楽に子どもを運べる、手が動かせるといったイメージなのである。今日の日本においても、育児書に描かれているのは、伝統的な習慣の見直しと叫びつつも、子育てエンジョイ精神のおんぶである。その裏には、子どもの数が減少して、一人から数人の子どもの育児に力を注ぎ、父親も育児に参加し、子どもとエンジョイすべきだというような、現代の子育てのイメージが伺える。

(3)抱っことおんぶの人類学

文献4)は、我が国の子育ての諸相を歴史的に追ったものである。この中で、「<抱っこ>と<負んぶ> そのスタイルの人類学」という章が立てられており、本稿ではこの章の概要を紹介する。

抱っこと負んぶという運搬・保育技術は、熊や鹿は機能的に不可能であるものの、猿には可能であり、動物園の猿山では抱っこや負んぶをしばしば目にする。つまり、抱っこと負んぶは人類以前からの歴史を持つものと言える。

昭和前期の保育学者西村真琴の「世界の子供の背負ひ方抱き方」(育児報告展集抄、1939年、全日本保育連名)で、世界諸地域・諸民族の抱っこと負んぶの分類を試みている。西村は、「子を荷ひ運ぶ習慣」の種々相には「人類の我が子愛育の諸相」があらわれていると言い、抱っこと負んぶの方法とかたちを表1の6つに分類している。

我が国でこうした抱っこや負んぶがいつ頃からあったのかというと、例えば縄文中期の石川県河北郡上山田貝塚から出土した一種象徴的な土偶には、その背中に手足を大の字に広げた幼子が張り付いている。この縄文中期より三千年後の西暦四、五世紀にあたる古墳時代には、

表1 抱っこと負んぶの方法とかたち 文献4)より

- (1)首かせ式 : いわゆる日本の「肩車」で、子供は大人の額に両手をかける。
- (2)カンガルー式 : 首・頭にひもをかけてつった袋に子供を入れて胸に抱える。
- (3)コアラ式 : 子供が背に負われているものすべて。
(ア) 子供の手が母の肩や首に取りすがる位置にあるもの
(イ) 子供の手が母の両脇から出でて胸に取りすがるもの
(ウ) 布または紐でくくり、子供の位置は(ア)にあたるもの
- (4)横たすきかけ式 : 肩から脇腹への幅広のたすきかけの中に子供を腰かけさせ、背のあたりに手を添えて安全性を保つ。
- (5)装置使用式(オポッサム式 : オポッサムは数匹の子をしっぽに捕まらせて背中に乗せる) : 子供をハク部為にいろいろな危惧を使う方法を総称。
- (6)その他 : 例えば、(ア) 頭の上に載せて子供を運び歩く、(イ) 乳を欲しがる時だけ抱き上げるが、飲み終わるとむしろの上に寝かせておく、(ウ) 決して抱いたり背負ったりして歩かない奇習。

栃木県鶏塚古墳出土の埴輪に、幼児を背に負って子守歌でも歌っているとおぼしき女性像も見られる。また、平安時代末期の鳥獣戯画などの風俗画には、階層を超えて抱っこと負んぶの習俗が垣間見られるようになり、江戸時代に至ると負い帯びやねんねこ半纏(ばんてん)と言った「負んぶ用具」まで発明されて、「日本式負んぶの技術」が完成されることとなった。

幕末から明治初期にかけて日本に来た欧米人の旅行記には、申し合わせたように、日本の親たちは負んぶという方法で子供を手厚く保育しており、日本は子供にとって天国であると記している。やむを得ないときしか乳幼児を抱き上げない「抱っこ社会」に育った欧米人には、すぐ子供を背負ってしまう「負んぶ社会」の日本が印象的であったのである。

この日本民族の抱っこと負んぶ習俗は、現在では大幅に状況が変わってしまっている。敗戦直後期までは、都会にも農村漁村にもどこにでも見られた母親の抱っこと負んぶ姿がほとんど目に触れなくなってしまったのである。とは言え、欧米風の生活をモデルとしてきたここ数十年の感覚からすると、負んぶは日本の・土俗的で野暮ったいものに感じられるが、抱っこは欧米でも盛んに行われており、センスある乳幼児の運搬・保育方法だという印象で受け取られている。このように、特に負んぶの衰退は著しいものがあるが、その代わり街に氾濫しているのがいわゆるベビーカーである。

本書の筆者(上氏)は、ベビーカーにあまり賛成することができないと述べている。大人にとっては軽快で格好の良い保育的運搬車かもしれないが、乗せられる子供にとっては心理的にこの上なく恐ろしいものなのかもしれない。子連れでの外出に器具を使うのなら、せめて子供と親が対面し、視線や言葉を交わし合えるものをえらび、できれば伝承的な幼児運搬・保育方法である抱っこと負んぶ

を新たなかたちで復興させたいと著者は述べている。

4. まとめと考察

以上の文献レビューにより、子育てや外出手段の歴史的経緯から現代の我々が抱えている課題について、まとめてみることにする。

まず、女性のライフコースは1960年代生まれの人々を境に大きく変容しており、このことが、子どもを取り巻く諸問題に大いに関連しているように思われる。かつては口伝で伝承されていた子育ての知恵が、女性のライフコースが激変する1960年代を境に失われ、子どもに接する機会も、もちろん子育ての経験をもほとんど持たずして親になる人々が大多数を占めるようになった。これに伴い、育児書の重要性が増し、商業主義の育児雑誌が多数発刊され、育児の重要な情報源となっていく様子が読み取れる。

子連れの外出手段についても、かつてはどの地域でも見られた「おんぶ」が、戦後、ライフスタイルの欧米化に伴って急速に衰退し、変わってベビーカーが登場し、普及している。おんぶは、明治大正期に「がにまたになる」「足の血行が悪くなる」「野蛮な未開国の風習である」などと述べられていたものの、一般には非常に多く用いられてきた運搬・育児方法であった。戦後はおんぶ等の伝統的育児方法が見直される機運もあったものの、「野暮ったい」イメージと、ベビーカーの普及により衰退していることが特徴的である。

今後は、これらの歴史的変遷を踏まえて、現在の子育て中の外出行動の実態や、課題について調査し、その課題を緩和する方策を模索していきたい。

謝辞 : 本稿は、日本交通研究会平成20年度自主研究プロジェクト「子育て中の外出および社会参加を支援するバリアフリー施策に関する研究(主査: 東京大学大森宣暁先生)」の一環として作成された報告書をまとめたものである。ここに記して謝意を表す。

<参考文献>

- 1) 原田正文 : 子育ての変貌と次世代育成支援 - 兵庫レポートにみる子育て現場と子育て虐待予防 -, 名古屋大学出版会, 2006 .
- 2) 有吉僚子, S.ブーコック編著 : 育児の国際比較 - 子供と社会と親たち -, NHKブックス, 1997 .
- 3) 横山浩司 : 子育ての社会史, 勁草書房, 1986 .
- 4) 上笙一郎 : 日本子育て物語 - 育児の社会史 -, 筑摩書房, 1991 .